ISSN 1345-3580

# Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.8 August 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

8

CONTENTS

・巻頭言
見る・聴く・分かる
／井上　昭洋 ..... 1

・文脈で読む「身上さとし」（14）
明治 22 年 1 月～ 2 月
／深谷　耕治 ..... 2

・英語文献にみる天理教（5）
D.C. グリーンの『Tenrikyo』（1）
／尾上　貴行 ..... 3

・音のちから―中国古代の人と音楽（21）
出土楽器が語る音の世界―注目される秦の音楽文化―
／中　純子 ..... 4

・ヴァチカン便り（69）
法王Ｇ７サミットに初参加
／山口　英雄 ..... 5

・天理参考館から（36）
猫と犬と馬と狐
／幡鎌　真理 ..... 6

・2024 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』に学ぶ（10）
第 1 講：172「前生のさんげ」
／井上　昭洋 ..... 7

・おやさと研究所ニュース ..... 8

第 368 回研究報告会（6 月 17 日）
／ 2024 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

## 見る・聴く・分かる

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

４月号から７月号にかけての巻頭言では、フィールドワークにおける参与観察とインタビューの事例をもとに、見ることについて、聴くことについて考えてみた。人は知識や経験が異なれば、同じものを見ていても同じようには見えていない。信者には１階建てに見える神殿が未信者には２階建ての建物に見えることもある。また、私たちは人の話を聴いて分かったつもりでいても、大事なことを聞き逃していることがある。録音したインタビューを文字起こしし、それを何度読んでも聞き逃していたことが、時をおいて突然見えてくることがあるのは、私の調査経験で紹介したとおりだ。

私たちには何が見えているのか？　私たちには何が聞こえているのか？　同じものを見ても、同じことを聴いても、同じように見えず、聞こえずということが往々にしてある。さらに、聴くことに関しては、話し手と聞き手の関係性も影響を及ぼす。ほぼ同じ知識や経験を持つ調査者であったとしても、その調査者が男性か女性か、外国人か同胞かによって、相手の態度も変わる。セクシャルな事柄についてのインタビューであれば、調査者がインフォーマントと同性か否かによってインフォーマントの回答の仕方も変わってくる。同胞の若い研究者には決して明かさなかった年配者だけが知っている村に伝わる秘儀も、外国人研究者相手であればたとえ若くてもオープンに話をする長老がいたりする。

見ることについて言えば、目に入ってくるものをありのままに認めること、聴くことについて言えば、耳に入ってくることをそのままに聞き止めることが大切になってくる。そこで必要とされるのは、対象を愚直に見つめ、また愚直に聞き入れる態度とも言える。それは対象に近接したまま細部に注意を払うようなアプローチの仕方である。この見たまま聴いたままの事柄から生まれる素朴な疑問が調査の起点となることが多い。

一方、対象から意識的に遠ざかって俯瞰することで見えてくるものもある。個々の細部の繋がりが突然姿を表すような形で見えきて、なるほどと合点がいくような経験は誰しもあるはずだ。対象に近づいて舐め回すように見たり、一言一句に注意を払って逐語的に聴いたりすることでは分からなかったことが姿を現すこと。突然、視界が開けて、それまで見ていた物事が違って見えてきたり、それまでに聴いていたはずのことの中に隠れていた意味が突然聞こえてきたりすること。本当に分かるということは、そういうことかもしれない。

細かな部分について理解し、それらの関係性を理解した上で、全体として捉えようとする分かり方をホーリスティックな理解と呼んだりする。それはただ漠然と全体を眺めることではない。細部を了解したうえで全体として理解しようとする態度である。近づいて細かなことに注意を向けることと距離をおいて俯瞰して全体を眺めることを交互に行うような意識のあり方だ。この相対する２つの地点の間をオシレート（往復運動）しながら対象を分かろうとする態度は、主観的な参与と客観的な観察を同時に行おうとする参与観察のそれに相通じるものがある。それはまた、同時にネイティブ（信仰者）であり人類学者（宗教学者）であることを通じて、文化や信仰にアプローチしようとする態度を想起させる。

ところで、私たちは微視的に物事を捉えてしまい（抱えている問題にあまりにも近づきすぎて）煮詰まってしまうことがままある。そういう時に、神殿や教祖殿に参って、はたと気がつく経験をしたことはないだろうか。神意が向こう側から訪れてくるような経験だ。人によってはそれを「悟り」と呼ぶかも知れない。神殿や教祖殿は、細かなことに囚われがちな私たちにあらためて問題を俯瞰させてくれる場所でもある。

# 明治 22 年 1 月～ 2 月

天理大学人文学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

明治 22 年 1 月、大阪眞明組（芦津分教会）、大阪明心組（船場分教会）に続いて増野正兵衛ら兵庫眞明組（兵神分教会）も教会設置のお許しを頂いた。しかし、まだ教会の場所や会長について明確には決定しておらず、「おさしづ」を仰ぎながら事を進めていった。

- 明治 22 年 1 月 27 日（陰暦 12 月 26 日）午前 8 時：清水与之助身上伺（兵神分教会所地所未だ決定せざるに付、清水身上よりその事を伺う）／押して願／又押して願／清水与之助神戸に帰り運び度きに付、お暇を願
- 同日：増野正兵衛より清水与之助分教会の相談に帰るに付、私も同じ講社の事故同道にて一度帰り運び度きに付御暇を願／前々清水与之助のおさしづの中に『これ元かいな、これが理かいな』と仰せられしは、兵庫の講元端田宅の所でありますや、富田の地面でありますや願、増野一人の心にて伺
- 1 月 30 日（陰暦 12 月 29 日）：神戸へ帰り講元周旋方一同寄って兵神分教会の地所に付談示し、富田伝次郎地面と定めて御許しを願、清水与之助、増野正兵衛両名より伺／押して伺桝井伊三郎より、先日清水与之助おさしづ中に『これが元かいな、これが理かいな』と御聞かし下されしは、講元端田久吉の所でありますか、又天理教会設立に付きては、磯村卯之助初め清水与之助、増野正兵衛の三名よりだん〳〵尽力下され、清水、増野両名は今に於て尽力下さるが、両名の所でありますか、いずれでありますか
- 2 月 4 日（陰暦正月 5 日）：清水与之助身上障り伺
- 2 月 8 日（陰暦正月 9 日）午後 10 時 30 分：神戸分教会長につき増野に勤めて貰い度き由を講元周旋一同より申入に付、御許し下さるや、いかゞのものでありますや、増野正兵衛身上より伺
- 同日（陰暦正月 9 日）：増野正兵衛鼻血朝七八度出で、且左足のくさの障りに付伺

明治 22 年 1 月 27 日、清水与之助の身上の障りを通して、兵神分教会の場所について伺った。「多くの理を運んで居る処、あちらこちら一つにどちらもどうとも言えん」とお言葉があり、押して伺うと、「どちら濃いい、こちら濃いい、どちらこちら一つの理に治めにゃならん」と具体的な指示ではなく、一同の心を繋ぐことが諭されている。さらに押して伺うと「これが元かいな、これが理かいな。一つ目に見えまい」とお言葉があり、「一日々々天より理を下ろす、理を下ろす。一つの理に寄せて心通り下ろす」と、親神の思召に心を寄せようとする、その心通りの守護であると諭されている。

そこで、清水と増野正兵衛は一度神戸に帰ることにした。ただし、正兵衛は具体的な場所の指示を望んでいたのか、先ほどの清水の「おさしづ」の「これが元かいな、これが理かいな」というお言葉について「兵庫の講元端田宅の所でありますや、富田の地面でありますや」と伺っている。兵庫眞明組の講元を務めて来た端田久吉宅か、講脇の富田伝次郎の所か。「増野一人の心にて伺」とあるのは、自分自身の心得のためという意味であろうか。しかし、やはり具体的な指示はなく、「いかなるも談示やで」と、あくまで談じ合いによってみんなの心を寄せることが示され、「一手一つ理が治まれば日々理が栄える」と「一手一つの理」が諭されている。

両名は神戸に帰って早速信者たちと話し合いの場を持った。そして再びおぢばに帰り、改めて 30 日に「おさしづ」を伺っている。話し合いの結果、「富田伝次郎地面と定めて御許しを願」うこととなったようである。ところが、「理上尋ねるどちら〳〵とは言えん」とはっきりしたお許しが出なかった。そこで、桝井伊三郎より、それでは端田久吉宅か、あるいは清水、増野のところかと伺った。その際、桝井も、先日の「これが元かいな、これが理かいな」というお言葉について思案したようである。「前々尋ね。これが元かいな、これが理かいな、という理を聞き分け」と応じられて、「神一条の道無き処の道は無い」と神一条の道を示されながら「どちら〳〵言わん。十分理を以て治めるなら、十と治まりた」と諭されている。

5 日後の 2 月 4 日、清水が「身上障り」で伺うと、「成るよう、行くよう。成らん道は通すとは言わん。しっかり聞き取って、めん〳〵心発散すれば、身も治まる」と、無理に通すのではなく、成って来るよう通ることを諭されている。

それから 4 日後の 2 月 8 日、正兵衛の身上の障りを通して伺ったが、その内容は講元、周旋一同から兵神分教会の会長を正兵衛に勤めてもらいたい申し入れがあったことについて御許しが頂けるかということであった。まず「何彼（なにか）に治まり難くいから一日の日遅れる。早く理上、治め一条、成らん事をせいとは言わん」と仰せられて、「前々これまでの処話々してある。ぢば一つの理という」と、これまでのおぢばへの移転の遅れについて諭されている。「このぢば幾名何人あるか。これから人数何人ある。よう聞き分けてくれねばならん」とおぢばの意義や、そこで勤める者の必要性について説かれている。

その日、正兵衛は鼻血が止まらず、「鼻血朝七八度出で、且左足のくさの障り」についても伺っている。「いつまで見て居てはどうもならん。尋ねたら治めてくれ」と、神意の実行が諭されている。

「鼻」

『身上さとし』では、2 月 8 日の正兵衛の「おさしづ」について「どちらがよかろうと迷わずに、今日この際に早く理をおさめよという意味で、鼻血は、のっぴきならぬ時期が差し迫っているから、早く理を治めることを指示していられるのであろう」と説明している。[1]

この頃の正兵衛としては、前々から諭されてきたおぢばへの移転、会長の選出と教会の場所の決定と、いろいろと思案することがあった。その中で、周りの人々の申し入れもあって正兵衛が会長に選出されたが、それは神意ではなかった。一連のお言葉を考えると、談じ合いとは、人々の総意を得ることではなく、人々の心をあくまで神意に寄せることが重要だと拝察される。

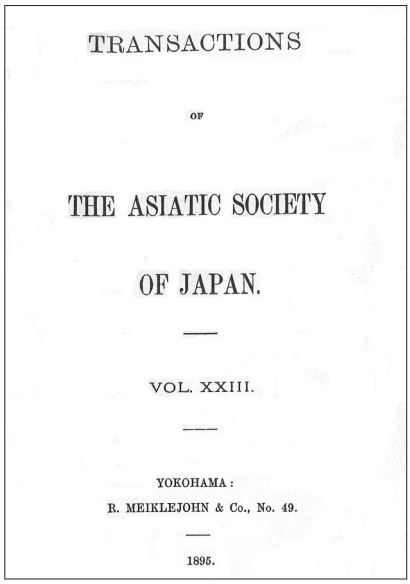
［註］

（1）深谷忠政『教理研究身上さとし―おさしづを中心として』天理教道友社、1962 年、84 頁。

# D.C. グリーンの『Tenrikyō』（1）

おやさと研究所准教授
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

1895 年（明治 28 年）に発表された D.C. グリーン博士（Dr. Daniel Crosby Greene）による『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』（天理教―天の理の教え、以下『Tenrikyō』）は、外国人による天理教に関する最初の外国語研究論文であると考えられ、その内容やその後の外国人による天理教研究へ与えた影響において、非常に意義深い特筆すべき文献である。この論文は「日本アジア協会」が発行する『Transactions of the Asiatic Society of Japan』（日本アジア協会紀要）の第 23 巻 1895 年 12 月号に掲載された。


TRANSACTIONS

OF

THE ASIATIC SOCIETY

OF JAPAN.

VOL. XXIII.

YOKOHAMA:
R. MEIKLEJOHN & Co., No. 49.

1895.

『日本アジア協会紀要』第 23 巻表紙

日本アジア協会は 1872 年（明治 5 年）に横浜で創立された日本最古の日本・アジア研究団体である。創設時の 100 名を超える会員には外国人の外交官、宣教師、商人などが含まれ、英国籍が過半数、米国籍が約 2 割、日本人会員として森有礼が一人入っていた。また『日本アジア協会紀要』は協会創立 2 年後の 1874 年 10 月から協会機関誌として発行が開始された。日本や極東全般に関する研究論文集であり、その内容は、日本を中心とした歴史、言語、文学、宗教、芸術、地理、風土、考古学、植物学などあらゆる分野にわたっていた。[1]

グリーン博士の『Tenrikyō』は、この学術誌 1895 年 12 月号の 24 ～ 74 頁に掲載された約 16,000 語の英文での論文である。全部で 9 つの見出しに分けられ、その主な内容は以下の通りとなっている。

導入部分（見出しなし）：神道の概略、黒住教会や蓮門教会などの神道各派、近年台頭してきた天理教、天理教研究のための文献、仏教関係者による天理教批判文献

The Origin of the Tenrikyō（天理教の起源）：教祖中山みきの生い立ち、教祖 32 歳の時の出来事（我が児の命に代えて預かり児救済）、教祖 40 歳の時の出来事（神の啓示）、神道・仏教からの反対攻撃、教祖の死と墓地、天理教の伸展と教勢の現況

The Cosmogony（宇宙創成説）：天理教の十柱の神々についての概説、人間創造の話

The Literature of the Tenrikyō（天理教の文献）：グリーン博士が入手した文献（写本、聖歌、説教集、「神様の由来」、「神様のこうき」）、おふでさき約 40 首のグリーン博士による英語試訳

The Hymns（聖歌、みかぐらうた）：みかぐらうた、グリーン博士によるかぐらづとめ・よろづよ八首・12 下りの英語試訳

The Doctrines（天理教教義）：天理教教義に見られる思想（儒教、神道、仏教哲学）、月日、二神、“神おろし”、人類兄弟説、病気救済、道徳観念、天理教におけるキリスト教の影響

Worship（礼拝）：音楽と踊りによる神への礼拝、牛込支教会、三島の教会本部の神殿と建築様式、かんろだい

Methods of Propagation（布教方法）：主要な方法としての公開説教、病気治癒

Organization（組織）：三島の教会本部でのインタビュー、教会組織、信徒団体、教会長、布教師、教師の報酬

Conclusion（結論）：天理教の世論への迎合・合理主義、超自然主義的要素消失の傾向、比較宗教学の好例としての天理教

濱田泰三氏によれば、天理教教会本部がこのグリーン博士による英語論文の存在を知ったのは 1928 年（昭和 3 年）のことであり、[2] この論文が発表された 1895 年から実に 33 年後のことであった。そして、それから約 3 年後の 1931 年、中西喜代造氏によるこの論文全文の日本語訳が、『天理時報』で 1 月 8 日号から 9 月 10 日号まで合計 31 回にわたり掲載されたのである。この日本語訳は、本島史料集成部編『中西喜代造集（前篇）』（本島社、1936 年）に収録されている。

中西氏はこの日本語訳を発表したのち、『天理図書館月報』11 号～ 13 号（1932 年）に「『グリーン氏天理教』に就いて」とのタイトルで、翻訳を通じての所感やこの英語論文の意義などを記している。また大久保昭教氏は、その著書『外国人のみた天理教』（天理教道友社、1973 年）でこのグリーン博士の論文を取り上げ、その内容を紹介しながら、この論文の特徴、天理教研究における意義などについて考察している。両氏の論考についてはいずれ別の稿で取り上げたい。

この論文が『日本アジア協会紀要』1895 年 12 月号に掲載される少し前に、実はその内容の一部がすでに英字新聞『The Japan Weekly Mail』に掲載されていた。このグリーン論文をよく見てみると、そのタイトルと著者名の後に「Read March 13th and May 22nd, 1895」（1895 年 3 月 13 日と 5 月 22 日に発表）と記載されていることに気づく。この論文の内容は、同年の 3 月 13 日と 5 月 22 日に行われた日本アジア協会の会合で 2 回に分けて発表され、その報告内容の要旨が、『The Japan Weekly Mail』にニュース記事として掲載されているのである。この発表の内容がどのようなものであったのかは大変興味深いところであり、掲載されたニュース記事からその様子をうかがってみたい。次回から数回にわたり、その報告内容について見ていくことにする。

［註］

（1）秋山勇造「日本アジア協会と協会の紀要について」『人文研究：神奈川大学人文学会誌』152、2004 年 3 月 5 日、71 ～ 82 頁。

（2）濱田泰三『やまとのふみくら』中央公論社、1994 年、41 頁。

# 出土楽器が語る音の世界―注目される秦の音楽文化―

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

## 注目される秦の音楽文化

儀礼とその音楽のあり方を重視する儒家が重んじられるようになるのは漢代になってからである。しかしながら、古代中国音楽史の研究では、これまで儒家を軽視したとされる秦代と儒家を重んじた漢代が、「秦漢時期」という一つの括りで取り上げられてきた。中国音楽史のバイブルとも考えられる楊蔭瀏『中国古代音楽史稿』（人民音楽出版社　1981 年）に第五章「秦・漢」とあり、余甲方『中国古代音楽史』（上海人民出版社　2014 年）でも「秦漢音楽」として説明がなされている。その理由は、秦代の文献資料が極めて少なく、それに比して漢代資料は豊富なところにあると考えられる。しかしながら、漢代の音楽機関として認識されてきた「楽府」も、実は秦代に創建されていたことは、始皇帝陵からの「楽府鐘」（上図『中国文明史図説　秦漢；雄偉なる文明』4 創元社　2005 年 29 頁）の出土によって知られている。それは、つとに北京大学の陰法魯氏も「考古資料与中国古代音楽史」（『中国歴史博物館館刊』第 13/14 期 1989 年）で述べている。最近では、劉再生氏の『中国音楽通史　古代音楽巻』（人民音楽出版社　2023 年）に、その第四章で「秦漢時期音楽」とひとくくりにしながらも、漢の武帝が楽府を設立したというこれまでの認識は訂正されねばならず、秦王朝のときにすでに楽府が設立していたと明言している。漢代の文献記録によって歪められてきた秦代音楽文化の研究が今後は進められるだろう。

最近では、秦の始皇帝の兵馬俑からの出土によって、その東南には百戯俑と呼ばれる皇帝のための雑技集団の俑が見つかり、また皇帝陵の北に池を模した溝の両岸に青銅の鶴や白鳥が配された水禽坑が発見され、そこには楽器を奏でる楽士俑も出土して、皇帝の宴を再現したとされている（村松弘一「秦始皇帝の兵馬俑―色彩豊かな秦の地下軍団」『中国文化事典』丸善出版　2017 年）。また、「音楽好きの秦人」と、上記の『中国文明史図説』にもみえ、その独特な形の編鐘（左図　同上 27 頁）も取り上げられている。そもそも秦代の『呂氏春秋』には音楽について記したところがあり（「十二紀」仲夏紀「古楽」）、古代音楽を考えるうえで重要な資料となっている。そこには、天下がうまく治まっていた古の朱襄氏の御代には、たとえ自然の陰陽のバランスを欠いても、士達という臣下が五弦の瑟を奏でると調和が保たれた、という話が収録されている。また、かの中国の伝説上にしばしば登場する黄帝が、伶倫という臣下に楽律（十二律）を作らせたことも載っている。大夏の西の崑崙山の北にある谷の竹を三寸九分に切って吹くと、黄鐘の宮という音が得られた。それをもとにして鳳凰の鳴き声によって十二の音を決めたというのである。それこそが後世の中国の楽律の根幹を成してきたことを考えると、儒家を重んじない秦代に、後世の儒家の楽論とは違った意味で、音楽の重要性がすでに認識されていたと思われる。付言すれば、『呂氏春秋』は秦が中国を統一するのにブレーンとして貢献した呂不韋が編纂させた書物であり、始皇帝もそのなかの「十二紀」を中心として、その内容を理解していたとされる（鶴間和幸『始皇帝の愛読書』第二章　山川出版社 2023 年）。

## 咸陽宮の銅人

そんな秦代に、以下のような逸話が残されたのは偶然ではない。

> 秦の咸陽宮に、銅製の人形が十二体あり、みな三尺（漢代では一尺が 23㎝ほど）だった。人形は一つの筵に並び、それぞれが琴・筑・竽・笙を持っていた。どれも組紐をつけたあでやかな衣裳は、まるで生きている人のようだった。筵の下には、二本の銅管が通り、それが数尺の高さのところまで伸ばされていた。うち一管は空洞で、もう一管の方には、指くらいの太さの縄が入っていた。一人が空洞の管に息を吹きこみ、もう一人が縄をひきしめると、琴・瑟・竽・筑がみな演奏され、まるで本物の楽隊と変わらなかった。（秦咸陽宮中有銅人十二枚，坐高皆三尺。列在一筵上，琴筑竽笙，各有所執。皆組綬華采，儼若生人。筵下有【二】銅管，上口高数尺。其一管空，【一管】内有縄，大如指。使一人吹空管，一人紐縄，則琴瑟竽筑皆作，與真楽不異）（【　】は、『四庫全書』所収『西京雑記』により補った）

これはもともと漢の劉歆『西京雑記』（後に晋の葛洪が編集）にみえる逸話で、宋代に編纂された『太平広記』巻 203 に「咸陽宮銅人」と題して採録された。ほかにも、「昭華管」と題して、吹くと車馬や山林が眼前に現れる咸陽宮の笛の話もみえる。楽人の人形があったことについては、あの兵馬俑を作り出した秦の始皇帝の時代ならさもありなんではある。始皇帝陵の地下宮殿では近づくものがあれば機械仕掛けの弩が発射されるようになっていたという（鶴間和幸『始皇帝陵と兵馬俑』講談社学術文庫 2004 年　228 頁）。それを考えれば、こうしたからくり人形もできないはずはない。『西京雑記』には、ほかにも始皇帝陵の墳丘のうえの石製の麒麟の前足が折れて、血のような赤いものが付いていたのを見た地元の父老が、石の麒麟にも血や筋があって生命があると言った、という故事がみえる。まるで生きているかのように麒麟が設えられていたということだろうか。それは不思議な話というよりも、当時の技術がそれほど優れていたことに驚嘆するべきなのかもしれない。

『列子』という書物にも、先秦の話として周の穆王のときに、ある匠が生きているかのような人形をつくったという記載がある（「湯問篇」）。それが合図にしたがい音律に合わせて歌ったり、リズムに合わせて踊ったりして、穆王もそれが人形とは思わないほど精巧なものだった。『列子』は、前漢から西晋までに編纂されたものであるとされており、その記載内容はすべて先秦とは断定できないが、先に引用した『西京雑記』からは、秦代には優れた技術をもつ匠が確かに存在し、楽人の人形が実在したことが伺える。

われわれ日本人は江戸時代のからくり人形の動きに目を見張るが、そのなかには「鼓笛児童」と呼ばれる笛と鼓を鳴らす人形もあった（『機巧図彙』下巻）。それよりもはるか以前の秦の時代に、精巧なものが作られたのは、権力者の下に集められた技術者集団が、権力者の威信をかけて心血を注いだ結果であった。文化的な優位性を示すことにより、民の心を手中にすることが、神とつながることと同じくらい重要だったのかもしれない。咸陽宮の銅人は、そんな民の驚きと服従を勝ち取るためのものでもあったろう。

ヴァチカン便り（69）

# 法王Ｇ７サミットに初参加

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

法王フランチェスコは６月14日、イタリア首相ジョルジャ・メローニの招待を受けて、イタリアのプリア州ボルゴ・エンヤツィアで開かれたＧ７サミットに出席した。というのも、今回のサミットにはＧ７の首脳の他に、ヨーロッパ、インド、アメリカ、サウジアラビア、アラビアの代表者が来訪し、ＡＩ関連の会議に出席するからだ。ＡＩをめぐる倫理的問題については、イタリアとヴァチカンは同じ意見を持っている。その中心となって理論的仲介をしているのが、法王庁立グレゴリアン大学の教授で、神父のパオロ・ベナンティ氏である。

法王は６月14日早朝、ヴァチカンに100名以上の世界の喜劇役者を迎え、特別謁見をした。「皆様方は日々人を笑わせ、喜ばせている。神をも笑わせてほしい」と訴えた。「神も笑うのですか？」という記者の問いに「もちろんだとも。神は愛している者と冗談が言えることを望んでいるのだからね」との言葉を残した。そして法王はただちにその場を辞して、ヘリコプターに乗り込み、Ｇ７の開催地へと飛んだ。

こうしてローマ法王の初めてのＧ７参加が行われた。「これは歴史的瞬間です。ＡＩは魅力的であるが、同時に恐ろしい問題をはらんでいる。それは、まさしく聖なる正しさを持って扱うべき問題です。ＡＩのみならず、いかなる機械も人間の命を奪ってはならない。」法王は近年、新しい大戦が起こることを心配しており、「話し合いによる平和は、終局のない戦争よりはるかに良いものです」と述べた。

アメリカのバイデン大統領は今年11月には満82歳になるが、法王も12月には満88歳となる。Ｇ７参加者の中で法王は最も高齢者になるのだ。法王はＧ７の首脳はじめ参加各国の代表団と挨拶を交わした。ウクライナのゼレンスキー大統領に対しては、「神はあなたを祝福している。しかし、ロシア国内を攻撃するためにＮＡＴＯの武器を使ってはいけません。戦争のエスカレーションを避けるべきです」と述べた。ゼレンスキー大統領は、「戦争終結のために、パロリン枢機卿を派遣していただき、また平和の使者として、イタリア枢機卿代表団長のズッピ氏を派遣していただき、ロシアに連れ去られた388人の子供がウクライナに返還されるように尽力して下されたことを感謝します」と、法王に応じた。

この日は精力的に動いた１日だった。法王は朝７時55分より特別謁見をこなし、正午ごろＧ７の会場に着き、諸会議に出席した。全てが終了したのが午後８時45分。予定より１時間遅れて、ヴァチカンに戻るヘリコプターに乗った。メローニ首相は法王に対して、その労をねぎらった。法王は「私はまだ生きてますよ」と応じたが、首相は「私も生きていますよ」と答えて、二人して微笑んだ。

## 第１回世界子どもの日

５月25日、26日の両日、第１回「世界子どもの日」集会に、世界の101カ国から５万人以上の子供たちが保護者と共に、ローマのオリンピック競技場に集まった。この集会には、法王をはじめとして、イタリア大統領及び首相、歌手のレナート・ゼーロ、元サッカー選手のブッフォン、喜劇役者のバンフィやベニンニも参加した。この集会では、ウクライナのハルキウから参加した子供が「爆弾の恐怖」を話し、ベツレヘムから来た子供は「城壁が隔てるもの」について話した。またロマの子供は、「どのようにしたら、世界の子を愛せるか」と問いかけ、ニカラグアから参加した子供は「家もなく、仕事もない人たちはどうやって生きていくのですか」と尋ねた。法王は会場の皆に向かって「すべてを解決するために、共に祈りましょう」と訴えた。「無実なのに痛みがあるということに答えはありません。ただ、祈るしかないのです」。

法王は、戦地から30名ばかりの子供たちを招待していた。その中には、戦争で障害を負った子供や親を失った子供たちもいた。その中の一人が「平和を作るのは可能でしょうか？」と尋ねたところ、法王は「できるとも。平和は常に可能です。あなたがたは素晴らしい世界を作ることができるのですよ」と答えた。

２日目の会場はヴァチカンのサン・ピエトロ広場だった。当日の主役はイタリア喜劇界の第一人者ベニンニだ。会場は彼の独壇場だった。５万人の子供たちは大いに笑い、大いに楽しんだ。その後、法王の話を神妙に聞き入ったのである。「福音と言われるのは、人を癒し、痛みを共にすることです。最高のことは、人を思いやることです。今の世界は、慈悲とか愛とかを知らない人が治めているのです。子供たちなら、戦争ごっこをして遊んでいても、誰かが一人でもケガをすれば、すぐに戦争ごっこを止めるのに、大人たちは多くの人々が傷ついても決して戦争をやめない。それは、戦争を止める言葉を知らないからなのです。あなたがたの中から、いつかその魔法の言葉を発見する者が出てきますように」。次回の「世界子どもの日」は、2026年９月に開催することが決定した。

## カソリック界に異端の動き

カルロ・マリア・ヴィガノー神父は1941年１月16日イタリア北部のヴァレーゼに生まれた。1992年から1998年までナイジェリアのヴァチカン大使、2011年から2016年までアメリカ合衆国のヴァチカン大使となった。８年前の2016年に75歳となり、定年退職した。だが、ヴィガノーはその直後から、聖ピエトロの座につくものを攻撃し始めた。彼は反法王フランチェスコ派の急先鋒に立つようになり、2018年８月には法王に対して、辞任するように迫った。彼はまた、現法王のコンクラベ選挙の非合法性を訴えるとともに、第二ヴァチカン公会議を受け入れることができないと宣言した。宗教者の世界会議は悪しきイデオロギーに汚染されており、法王フランチェスコが指導する典礼はガンの転移したものであるとさえ述べた。彼は、半世紀前に異端的行動を取ったフランスのマルセル・レフェーブレ大司教を引き合いに出し、レフェーブレの擁護は自分の責務であると述べ、現法王は歴代の法王に反し、またキリストの教会に反するものであると断じた。これは明らかに異端的言動であり、ヴァチカンではヴィガノーの動向を注視して警戒している。

# 猫と犬と馬と狐

天理参考館学芸員
幡鎌　真理 *Mari Hatakama*

あらかじめ、動物に関係する館蔵品を紹介する稿ではないことをお断りしておく。平安期の貴族の日記を卒論に選んだ身として、今年の大河ドラマは興味が尽きない。以下のエピソードが今後放映されるかどうかわからないが、身分制と非条理が動物と絡んだ、物悲しい逸話を取り上げたい。

それは、『枕草子』でも有名な一節、猫と犬のいさかい事の顛末である。一条天皇は一匹の猫を、文字通り「猫可愛がり」しており、世話係として馬の命婦（みょうぶ）を特別に付けていた。表題の「猫と犬と馬」までがここで登場した。ややこしいが、“馬の命婦”はれっきとした人間で、宮中の女官である。外見や身体的特徴を指摘するのは憚られるが、想像するに顔の長い女性だったのかもしれない。

律令制の下では身分制は位階が基本になっており、朝廷に勤める官人は男性でも女性でも必ず位階をもっていた。公卿（三位以上と四位以下の殿上人）が内裏清涼殿の殿上の間に上がることが許される。彼らが貴族である。殿上人は天皇の勅許によってのみ特権的な待遇を得ることができたため、その天皇が退位すると効力を失う。注目ポイントは五位という位階で、五位になるかならないかで待遇やその他の面で格段の差があった。官人の大半はその五位に到達しない。「国立大学の教授は亡くなった後で勲二等をもらえるけれど、当時の諸大夫（しょたいふ）（四位、五位の官人）にすぎないから昇殿は人によるなぁ。まあ死んでるから関係ないがね」と、私の大学の恩師が苦笑いして語っていたことを思い出す。恐れ多くも、天皇の膝の上に上がるには五位の位階が必須で、猫は“命婦の御許（おとど）”という名を得た。“命婦”とは従五位下以上の位階を有する女性で、“御許”とは高貴な女性に対する敬称であり、男性には“大臣”や“御殿”と表記する。すなわち、天皇の愛猫はメス猫だった。猫と、その世話係の“馬の命婦”と、存命で活躍中の高名な国立大学教授の三者を考え、身分制の暗部と馬鹿馬鹿しさを痛感したのは若き学部生のころだった。

一方、犬は“翁丸”という名前で登場する。“丸”は船、人、刀、犬や馬の名前の接尾辞で、元々は上代から男子の人名に用いられていた“麻呂”に由来し、特に身分を表するものではない。“翁”といい、“丸”といい、名前から察するにオスだったのだろう。こちらは一条天皇が寵愛した皇后定子のサロンで可愛がられていて、定子の食事時には余りものをもらえるかと待機していたという。また桃の節句の折には、蔵人頭の藤原行成が翁丸の頭を桃の花で飾り立てたり、特別に桜の腰飾りを作ってやったりして、当人（犬）も得意げに歩き回っていた、と『枕草子』にある。ここでも述べられている通り、猫は首綱をつないで室内で大切に飼育される一方で、犬は屋外で放し飼いにされていた。『源氏物語』の若菜巻で、女三宮が飼う猫の首綱が簾に引っ掛かって巻き上げられる描写のような事態がたびたび生じていたのかもしれない。猫は個人的な、飼い主と一対一の関係だったが、犬は放し飼いということもあるのか共同で世話をする。江戸時代でも地域共同で面倒を見る地域の番犬となっていた。それが生類憐れみの令で大変なことになるのだが、それはまた別の話で、ともかく翁丸には特に世話係もなく、清少納言たち定子のサロン全体で可愛がっていた。その、天皇の愛猫と翁丸、馬の命婦の穏やかな日々に事件が起こった。

犬の御殿玩具　金沢　右：高10.8cm
加賀百万石の城下町、金沢の御殿玩具。房の付いた緋縮緬の首綱を巻いた狆を模した張子の犬。江戸時代には室内で飼う狆が大名や商人の間で流行した。これらには首綱を付ける。〈天理参考館蔵品〉

あるとき馬の命婦が、縁側で日向ぼっこをする猫に室内に入るように促してもいうことをきかないので、脅すよう翁丸に命令した。命令に忠実な翁丸が飛びかかったところ、驚いた猫が天皇の簾中に飛び込み、一部始終を見ていた天皇は激怒して、「この翁まろを打ちてうじて、犬島へつかはせ、ただいま」と命じた。馬の命婦は恐懼（きょうく）し、身も世もない有様になっている。犬島は犬の流刑地である。鳥飼（現：大阪府摂津市）近辺の淀川の中州にあったらしい。鳥飼は鳥を育てるというよりも、鳥養牧（とりかいのまき）という畿内に設置された近都牧（きんとまき）の一つで、諸国から貢進された牛馬を育成する御牧だった。上流に上牧（現：高槻市）という地名が現在も残っている。このあたりには馬島という中州もあったというから、犬島も当初は流刑地ではなく、狩猟や番犬としての使役犬を訓練する場所だったのかもしれない。ともかく、お怒りになった一条天皇は翁丸を犬島送りとされた。その後、定子のサロンでは翁丸がいなくなったので寂しく思っていたところ、一匹の犬が全身腫れ上がった哀れな姿でよろよろと現れる。サロンの女房たちは、もしやと「翁丸か」と問いかけても反応せず、食べ物を与えても近づいてこない。ところがその犬は、清少納言が「可哀想なことをした」という言葉に反応して、身を震わせて涙をこぼすではないか。清少納言は“翁丸”と確信して名前を呼びかけると案の定切なく鳴いたので、人間を恐れて犬違いのふりをしていたことが判明する。犬島送りの途中で逃げ帰ったところ、ひどく打ち据えられて再び放逐された翁丸は、定子のサロンに逃げこむ。しかし身元が明らかになることを恐れて別人（犬）のふりをしていたのである。犬にも心があることよと天皇も御心を動かされて翁丸は赦された、という運びになっている。

愛犬家ならぬ人びともお怒りかもしれない。むかしむかし、犬は大切にされた。これは平安時代よりむかしという意味である。およそ9,500年前と推定される、日本で最古の犬の骨が神奈川県横須賀市の夏島貝塚から出土している。縄文時代の縄文犬の特徴は、きちんと墓がつくられて埋葬されていることで、後期には人間の墓の区域に犬の墓もつくられる。出土した骨を見ると、老年まで生きていた個体が目立ち、狩猟のパートナーとして大切に扱われていたことがわかる。弥生時代になると、犬は食用にもなった。食べられた後、骨がバラバラに解体された状態で出土するのだ。銅鐸に人間が犬とともに狩猟する絵があり、縄文時代同様に共に狩猟していたであろうに、働いてくれた犬を葬った墓は見つかっていない。人びとの犬に対する意識の変化は渡来文化の影響だろうか。

一条天皇は犬に冷淡だったが、応神天皇は犬を愛おしんだようで、狩猟犬に“麻奈志漏（まなしろ）”（＝愛しいシロ）と名づけたことが『播磨国風土記』に出てくる。この「猫と犬と馬」事件が起こった長保２年の末に定子はこの世を去る。表題の最後の狐には触れられなかった。稲荷神の神使である狐は朝廷に出入りすることができる命婦の格を授けられるのだが、それらは別の機会に。

# 第１講：172「前生のさんげ」

おやさと研究所長
井上　昭洋　*Akihiro Inoue*

「さんげ」

堺に昆布屋の娘があった。手癖が悪いので、親が願い出て、教祖に伺ったところ、

「それは、前生のいんねんや。この子がするのやない。親が前生にして置いたのや。」

と、仰せられた。それで、親が、心からさんげしたところ、鮮やかな御守護を頂いた、という。

以上がこの逸話の全文である。わずか６行ほどの非常に短い逸話である。ここで親が心から行った「さんげ」であるが、これは元来仏教用語であり、「慚愧懺悔（ざんぎさんげ）」と四字熟語の形でしばしば用いられてきた。「慚愧（ざんぎ）」とは罪を恥じることであり、「慚（ざん）」は自分に対して恥じること、「愧（ぎ）」は他に対して恥じることを意味する。一方、「懺悔（さんげ）」とは罪を告白して許しを請うこと、悔い改めることであるが、語頭が濁音化して「ざんげ」と発音するようになった。ただし、仏教では現在でも「さんげ」と発音する。天理教でも「さんげ」と発音するが、その意味は過去の過ちを悔い改めることに加えて、親神に感謝し、将来に向けて新たに心を定め、それを実行に移していくことを含意している。それは「おさしづ」の「さんげだけでは受け取れん。それを運んでこそさんげという。」（さ 29・4・4）にも教えられるところである。

ところで、この逸話では、親が「心からさんげした」とあるが、この親がどのような「さんげ」をしたのか、その具体的な内容は分からない。日常用語的な意味での「懺悔（ざんげ）」、もしくは仏教的な意味での「懺悔（さんげ）」をしたのか、天理教で言うところの「さんげ」をしたのか、定かではない。逸話のタイトルに「たんのうは前生いんねんのさんげ」という教えを思い出し、この親は「たんのう」して通ったので御守護いただいたのだろうかと考えたり、何かしらの心定めをしてそれを実行に移したのだろうと考えたりする人がいるかもしれない。はたして、この親はどのような「さんげ」をしたのだろうか。

２つの底本

明治18年頃の出来事についてのものと考えられるこの逸話には、少なくとも２つの底本がある。諸井政一の『正文遺韻』に収められた逸話「子供の盗癖おさとし」と『みちのとも』立教91年４月５日号に収められた春野喜市の教話「布教要旨(21)」である。春野バージョンは諸井バージョンの倍以上の分量があり、親がどのようにして娘の盗癖を知ったのか、親がどのような懺悔（ざんげ）をしたのかを詳細に描写している。特に、親の懺悔（ざんげ）の内容については、諸井バージョンでは親が「さんげ」したことにさえ言及していないので、貴重な情報となる。ここでは、両者のバージョンをもとにオリジナルの物語を紹介する（記述内容が一致しない箇所は大括弧で記す）。

堺に住む男は10年前に妻に先立たれ、当時３歳の娘がいたが、娘のためを思って後妻を取らず、仕事も辞めて娘を育てていた。だが、蓄えも無くなってきたので昆布売りをするようになった。男は、娘10歳の頃から遠くに行商に行くようになり、二、三日家を開けることもあったが、娘には食物と小遣いを与えていたのでしっかり留守番をしてくれていると思っていた。しかし、娘が近所の家に遊びに行っては物を盗み、それを換金して食物に変えていることを知る。注意をするとその場で泣いて謝るものの、やはり小遣いを使わずに盗みをする。時に厳しく折檻することもあったが、盗癖が治らないので、お屋敷に助けを請いに来た。仲田佐右衛門（儀三郎）が対応し、彼は以下のような教祖のお話を取り次いだ。

「娘は前生［前々生］ではお前の妻であった。家は相当に裕福であったが、お前は今の娘のように人の物を盗んでいた。妻は何遍も泣いて諌めたが、お前は言うことを聞かないため、世間を恥じ、苦しんだ挙げ句に亡くなってしまった。その妻が今お前の娘として生まれてきている。娘がすることはお前が先にして見せたことである。」

男はその話を聞くと、悪いのは娘ではなく、自分が前生で辛い思いを娘にさせてきたのだと悟り、詫びる心になって喜んで家に帰っていった。そして、寝ている娘の枕元で「お前は前々生、自分の妻で、その時お前が今使う心を自分が使っていた。自分の蒔いた種である。悪かった、すまなかった。どうか許してください」と手をついて懺悔（ざんげ）した。その後、娘の盗癖は治り、1ヶ月［60日］ほどして男はお屋敷にお礼参りに来た。

「たんのうは前生いんねんのさんげ」

同年代の諸井政一と春野喜市は明治20年代から30年代前半にかけて本部の御用を共に勤めていたと思われ、『正文遺韻』に収められている政一の妹の手記からも親しい間柄であったことが伺われる。この逸話の原作者は仲田儀三郎と考えて良く、彼から直接この昆布売りの話を聞いた人たちが当時二人の周りにいたのだろう。元来口伝であった逸話は、明治30年代に諸井により、昭和３年に春野によりテキスト化された。その後この２つの底本を参考に編集されたのが「172話　前生のさんげ」ということになる。しかし、事の次第を詳細に物語る２つの底本があるにも関わらず、この逸話はなぜこれほどまでに簡略化されてしまったのだろうか。

２つの底本を読めば、この昆布売りの抱えていた「事情」は父親の愛情に飢えて育った娘のクレプトマニア（窃盗症）の問題であることが分かる。この逸話はそのような問題を抱えた父子家庭の事情たすけと読むことができたはずだ。また、娘の枕元での父親の懺悔が、その後の彼の娘への態度に影響を与え、その改まったであろう娘への接し方が「さんげ」の中身であったと考えられないだろうか。男の「さんげ」は単なる懺悔ではなく、「運んでこそ」の「さんげ」であったと捉えれば、この逸話の持つ意味も変わってきたであろう。

この逸話が簡略化された理由はどこにあるのだろうか。私見ではあるが、男の前生についての教祖による詳細な説き分けを詳らかにせずに、今生における「さんげ」の大切さを強調することに力点を置いたのではないか。今日、私たちは自分の前生について教祖に直接尋ねて知ることはできない。そこにあるのは悟りのみである。「199話　一つやで」にもあるように、私たちは前生のことは「何んにも知らんのやから、ゆるして下さいとお願いして、神様にお礼申していたらよい」のである。前生のことについて知るより、今生をどのように生きるか。それが「たんのうは前生いんねんのさんげ」の教えの要点でもあった。

第 368 回研究報告会（2024 年 6 月 17 日）
「作家・室井光広（1955 ～ 2019）の芥川賞受賞作品と寄贈自筆原稿について」

金子　昭

先頃、作家の故室井光広氏のご遺族より、貴重な自筆原稿を含む書籍等の寄贈を受けた。現在、その整理と目録作成を進めている。今回の研究報告会では、標記の内容で報告を行った。

室井光広は、1988 年、33 歳の時に「零の力　J.L. ボルヘスをめぐる断章」で第 31 回群像新人文学賞（評論部門）を受賞し、1994 年、39 歳の時に「おどるでく」（『群像』4 月号）により第 111 回芥川賞を受賞した。室井氏は学生時代からデンマーク語の自習を始め、キルケゴール研究の第一人者である大谷愛人慶應義塾大学教授（1924 ～ 2018）の講義を受講し、卒業後も大谷教授の大部の研究書を読み続けた。大谷教授のキルケゴール関係蔵書は一括して天理図書館に寄贈されて、私が整理に当たっている。室井氏と交流が始まったのもこの関連からであったが、惜しくも 2019 年に 64 歳で病逝された。

室井光広は、世界文学を幅広く渉猟し、その蘊蓄（うんちく）に基づいて、どの現代日本の作家にも類例を見ない独特な文学世界を築いた。室井氏に影響を与えた主な作家としては、カフカ、ボルヘス、ジョイス、プルーストなどがいる。芥川賞受賞作品「おどるでく」の中にも、彼らの影響を見て取ることができる。おどるでくとは、カフカの掌編「父の気がかり」に登場するオドラデク（Odradek）に踊る木偶（でく）をかけた言葉だ。室井氏は、ここで東北地方の土俗性を世界文学に接続させている。

「おどるでく」は、「私」が東北の実家で発見した“仮名書露文”の「ロシア字日記」を読み解きながら、その関係者たちとの交流を描く物語である。この奇妙な日記に綴られたロシア文字が踊る木偶のように見えることから、「おどるでく」という名前がついた。カフカのオドラデクが「忘却された物たちが取る形態」（ベンヤミン）であるように、おどるでくもまた記憶されない無用者であり、暗い部屋の隅にうごめくスマッコワラシ（座敷童）に似ているという。それは「ロシア字日記」を書いた仮名書露文の姿であり、この物語を紡ぐ「私」の姿でもある。おどるでくは一種の「隠れ蓑」のようなもので、その中で意味や文脈が紡ぎ出されていく。室井光広は、何を書くかということもさることながら、どのように書くかということを意識した作家である。「おどるでく」の読者は、ボルヘスを思わせる言葉とイメージの迷宮に入り込んだ気分になるだろう（室井光広は「日本のボルヘス」と評されることもある）。

室井光広は東日本大震災を機に商業的文学誌に書くことを止め、自ら『てんでんこ』という文学誌を主宰し、“一号一会”のつもりで幾人かの書き手とともに自作を発表するようになった。また自ら「ノート作家」を任じ、大学ノート 100 冊近くに様々な文学的日記を残した（これは膨大な哲学的・宗教的省察を日誌という形で残したキルケゴールに習ったものである）。そのようなわけで、室井光広の未発表 / 未定稿類は少なくない。寄贈を受けた自筆原稿の中にも「言霊集」という大部の自筆原稿暫定稿が存在する。内容はシナリオ、詩、小説、エセー、評論などからなるが、こうした分類は暫定的なもので、実際にはそれらを相互に越境しているのである。

## 2024 年度公開教学講座のご案内

### ― 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（10）―

2024 年度の公開教学講座は、以下の日程でオンライン配信いたします。

第 1 回 6 月　井上昭洋所長
172 話「前生のさんげ」

第 2 回 7 月　澤井真研究員
114 話「よう苦労して来た」

第 3 回 9 月　岡田正彦研究員
135 話「皆丸い心で」

第 4 回 10 月　八木三郎研究員
36 話「定めた心」

第 5 回 11 月　森洋明研究員
85 話「子供には重荷」

第 6 回 1 月　中西光一研究員
144 話「天に届く理」

グローカル天理
第 25 巻　第 8 号　（通巻 296 号）
2024 年（令和 6 年）8 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　井上昭洋
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）

印刷　天理時報社
Printed in Japan